
ルパン三世 v s 怪盗キルシェ

花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルパン三世vs怪盗キルシエ

【Nコード】

N2706K

【作者名】

花

【あらすじ】

日本にある銀行から、とあるものが忽然と消えた。その数日後、KB博物館館長のデイゴラスの元に、2つの予告状が届く……。

プロローグ（前書き）

ルパン三世自体は余り詳しくないので、読んでて首を傾げる部分もあるかとは思いますが、その場合は脳内で修正を加えていただければと思います。

プロローグ

20XX年某日、東京。

その日、青年・宮古内秋彦は久しぶりにその銀行を訪れていた。

「いやあ、お変わりありませんなあ、宮古内さん」

「頭取さんも、お元気そうで」

日本人らしからず、握手を交わす二人。それは二人が、海外の文化に長く触れていた証拠。

「今日はどういったご用件で？」

挨拶もそこそこに、頭取は早速本題に入った。

「実はこれを預かっていてほしくて」

「これは……！！」

秋彦が取り出した《それ》を見た瞬間、頭取は尋常ではない反応をみせた。

正直言つて、他人から見れば《それ》は、そこまで驚くようなものには見えない。しかし、頭取は《知って》いたのだ。《それ》を《宮古内秋彦が渡してきた》ことが、通常ではありえないことだということ。

「今週引越すことになりました。その間、保管できそうな場所がないんですよ」

「神宮さんはどうしたんですか？」

「それが……出入り禁止になっちゃって」

神社に出禁で、あなた一体何やらかしたんですか。命狙われたときに逃げ込んだら、敵が建造物を崩壊させちゃって。あなた馬鹿ですか馬鹿でしょう何故警察に逃げ込まないんですか国宝とかどうするんですか。いや僕が壊したんじゃないんですって。同じですむしろ元凶があなたでしょう。

しばらくバツシングされる秋彦だが、頭取がようやく自体の重さに気付き、無理やり本題へ戻した。

「でもうちで構わないんですか？」

「銀行ほど安全なところはありませんよ。でも念のため、これの存在を教えるのは一部の人のみでお願いします」

「……わかりました。」

そして二言三言会話を交わすと、宮古内秋彦は銀行を去った。

二人は知らなかった。その会話を盗み聞きしている人物が居たという……。。

三日後、その銀行から《それ》は忽然と姿を消した。

01・ロンドン

イギリス、ロンドン。かつてシャーロック・ホームズの活躍したその街の、一角にあるアパルトマン。そこに、ホームズとは真逆の位置にいるであろう人物のアジトが存在していた。

フランスのパリを始め、様々な国でその名を轟かせた大泥棒、アルセーヌ・ルパンの末裔。ルパン三世だ。

ここは彼の所有するいくつものアジトのなかでも、かなり古い分類に入るだろう。次元大介も、ここを訪れるのは久しぶりだった。

「おい、ルパン。来てやったぞ」

「もー、次元ちゃん遅いんだからー」

「馬鹿言つな、今まで砂漠のど真ん中にいたんだぞ。仕事から直行してやっただけありがたいと思え」

出迎えてくれたルパンに続いてリビングに入ると、残りのルパンファミリー……石川五エ門、峰 不二子の姿があった。

「不二子？ こりゃまた珍しい」

「悪い？ 私だつてたまには手伝つよ」

「はっ、どうだか」

「大概、盗んだものを横取りする算段だろう」

次元に続いて五エ門もうなずく。そんなんじゃないわよー、と心のこもらない声を軽くあしらい、次元と五エ門はルパンに向き直った。

「んじゃ、全員そろったところで今回のお仕事の説明でも始めようかしらねー」

ポチっとな。

そんな昭和の香りがムンムンなかけ声で、ルパンはテレビのリモコンのスイッチを押した。

《速報です。たった今入ってきたのですが、あのルパン三世からイギリス警察に予告状が送られてきました。それによると、狙われているのは先日KB博物館に寄贈されたばかりの『あるもの』ということですが、博物館側の意向により、残念ながら狙われた『あるもの』の正体は公表されておりません。

今回のルパン三世の犯行声明に対し、インターポールの銭形警部は記者にこう述べ……》

ブツッ。

「まあ、とつつあんの声は後で散々聞くだろうから今は置いといて今流れた通り、今回はあのKB博物館に盗みに入るってわけなのよ。ちなみにこれ確定ね」

「KBって、あのデイゴラスが館長やってるところか!？」

「次元、知り合いか？」

五エ門の質問に答えたのは、不二子だった。

「知り合いも何も、裏社会では超の付く有名人よ。表ではイギリス

のKB博物館の館長を務める、気の優しいオジサマ。でも裏では美術品の違法取り引きをしたり、自分の部下を使って手に入れたものを盗んだりやりたい放題。おまけに邪魔者は簡単に殺しちゃうし」

「未だにブタ箱にぶちこまれないのが不思議なくれえな奴だ」

不二子の言葉に、次元はため息混じりの煙草をふかす。人のこと言える身ではないのだが、デイゴラスのやっていることを聞くと、どうも気に入らないのだ。

「デイゴラスはちょっとした軍隊持ってるからなあ。なかなか手出せないんですよ」

「で、あのオカルト野郎から何を盗むつもりなんだ？」

「んふふー、知りたい？」

「知りたいも何も、狙ってる物が何なのかわかると、仕事になんねえだろうが」

「ったく、次元は怒ってばっかだなあ」

そんなんだからいつまでたっても彼女がいないんだ。そんなもんいらねえ。あら、それにしてもこの香水の匂いって女ものよねえ。おぬし仕事から直行したのではなかったのか。

「本題いけ本題」

何故だか不二子や五エ門に責められる次元は、脱線した道を無理やり戻した。そもそも何故プライベートを言及されなければいけないんだ。

そんな次元の心境に手助けするように、ルパンは話題を戻した（元凶も彼だったが……）。

「さあさ皆のども、これ見て驚きたーまえー」

じゃじゃーん、とルパンが自分で効果音を言いながら取り出したのは、一枚の写真。

「……本気か？」

「もちのろんよー」

それを見た三人は、見事、心の意見を一致させていた。

こいつ、頭打ったのか？

01・ロンドン(後書き)

ようやくルパンが出てきました。が、依然として《ターゲット》は謎のままです。

犯行当日に判明するかと思います。

次回はキルシエの説明なお話になりそうです。お楽しみに！

02・日本、某アパート（前書き）

怪盗キルシエの説明。

ルパンたちは出てきません。

02・日本、某アパート

世の中には、科学で証明出来ないもので溢れている。

それは夢や心霊現象だったり、原因不明の病気だったり、言霊や呪いだったり、前世だったり……人の《気持ち》だったり。

それは、とにかく目には見えないもの。

そしてそれは、意外と身近にあるもの。

《えー、番組の途中ですが、ここで臨時ニュースです》

「ぎゃー……！」

北条四葉は、思わず頭を抱えた。

日曜日の午後六時。それは、オタクにとって何にも邪魔されたくない時間帯だ。朝から発令されている津波警報のせいで画面の1/4が日本地図で埋まった時でさえ殺意が芽生えたのに、放送中断してニュースだなんて……何のために録画しながらリアルタイムで放送してるんだらう。ニュースの内容など一切耳に入ってなど来なかつ

た。もうただの雑音だ。

《ピンポン》

かろうじて、玄関のチャイムは聞き取れた。

人生これで終わりだ、というほどに鬱な表情のまま、四葉は玄関までのっそり歩いていった。

覗き窓にうつる人物を見る。うん、知らない人だ。

もしもセールスマンだったら、私のこの鬱憤をはらしてくれるだろうか。喉まで愚痴が昇りつつあったが、そういえばガラス越しの男はスーツでも黒髪でもない。なら何だ？ 新手のオレオレ詐欺か？

とりあえずドアを開けてみた。

「誰？」

「ああ、僕……」

「オレオレ詐欺なら間に合ってます」

相手の返答も聞かずにドアを閉めた。いや、閉めようとした。ドアは閉めたつもりだ。でも開いている。隙間の向こうには、まだ同年代の男が見えている。

私より力の無さそうな彼は、しかし私が思い切り閉めようとしたドアをガシツと片手で止めていた。

「まだ《僕》しか言っていないでしょ」

「《僕だよ僕》っていうのかと思って」

「電話越しならともかく、会ってそんなことするわけないでしょ」
「わからないよ、もしかしたら《実は生き別れの兄弟だったんだ》
とか言っただけ生命保険に加入させようとするかもしれないよ」
「君がお兄さんしか家族いないことくらい知ってるよ。それに僕と
君じゃ、まず顔立ちが違う」
「……………誰？」

自分の家族構成を知る謎の同年代の人に、思わず本日二度目の質
問をした。

「君の上司ってところかな。怪盗キルシェさん」

……………なんだと。

よく見ると、男の後ろには、顔色を真っ青にさせた女課長がいた。
ああ、確実に上司だ。普段無表情の彼女があそこまで狼狽える姿を
見たことがない。あとで玄関先の監視映像を永久保存しなければ。
とりあえず、名乗りもアポもせずに直撃訪問されたのだし、臨時
ニュースで落ち込んでたし、あの態度は仕方なかったんだ。人のよ
ささそうな顔してるし、見た目同年代だからそこんとこ許してくれる
はず。

ひとまず独り暮らし専用の賃貸のリビングに二人を通し、昨日お

隣さんにもらった土産の八ッ橋を紅茶と出す。……無理です。独り暮らしに緑茶の必要性を感じません。

「連絡しなくてごめんね。なにせ緊急だったから。僕は君の所属してる機関Sの監理官代理で、宮古内秋彦といっています」

「北条四葉です」

宮古内秋彦。なんとも平成の時代にミスマッチな名前の彼は、あの監理官代理だった。

……監理官、代理？

「え、ナンバー2？」

「かなあ、一応」

また女課長・まりりんの顔色が悪くなった。ごめんなさい、私もかなり反省しました。

うち……機関Sは、政府直属の極秘調査機構。独自の司法権を持ち、一部エージェントには目的のためにはあらゆる法律を無視していいの特令が出ている、いわば《現代のお庭番》。総理大臣の《あれ》と違うところは……何だっけ、なんか色々判断材料あった気がするんだけど。

とにかく影でこそ調査したりとかする機関Sのただけ、私が所属しているのは《オーパーツ回収部隊》。ようは、科学で解明できない、かなり危険かつヤバイ品物を回収する係。その実行エージェントの一人が、この私・北条四葉。

普段は大学生やりながら、他の情報収集担当のエージェントが集めてくれた資料をもとに、日本国内のオーパーツの回収をしてる。

ただ、そのオーパーツというのは、単に山のなかに埋まっていたり、海のなかに沈んでいたりする訳ではない。悲しいかな、その実に九割が人の手に渡ってしまっているのだ。

本当は事情を説明して穩便に回収したいところだけど、所有者の大半がオーパーツを理解できない。つまり、こちらが説明しても無駄なのだ。かと言ってオーパーツをそのままにしていると、所有者の身に危険が及んでしまうし、最終的に公安とか警察が絡んで色々と厄介なことになってしまう。

そうなれば、残る手段はただひとつ。所有者からオーパーツを《奪う》しかない。

ここまでくれば誰だつてわかるだろう。あの巻で話題の《怪盗キルシェ》は、オーパーツ回収の仕事をこなすエージェントの私の姿そのものなのだ。

そんな私のもとへ、機関のナンバー2が訪れるだなんて、普通はあり得ないことで。ほんとに何で来たのか謎なだけけど。その前にナンバー2若くね、私よりせいぜい1個違いに見えるよ。

「あの、今日は何の用件なんでしょうか。私、次回の仕事は来週なんですけど」

「あ、やっぱり臨時ニュース見てなかった？」

「臨時ニュース？」

見てたというか流れてたけど、雑音になってたから内容なんてさっぱりだ。

「だと思ったわ。この子、もし見てたら今にも空港に行つてそうなもの」

「え、まりりん。どゆこと?」

頭に手をあてる女課長に代わり、始終ニコニコしてる宮古内代理が答えた。

「次の君の仕事内容、覚えてる?」

「あ、はい。なんでも、イギリスにある呪いのヤマザキを回収だつて」

「呪いのヤマザキ……」

いいじゃないかまりりん。それが一番伝わりやすい。

「そ、まさにそれを別の泥棒が明日盗むって犯行予告が届いたらしくてね。今世界で話題沸騰中」

「うそでしょ!?!」

「ほんと」

「明日!? 今日でもなく、明後日でもなく明日!?!」

「そう、明日。」

「そんな、明日は月曜日ですよ! いくら何でも学生が授業休めませんって!」

「明日のアニメがリアルタイムで見れないの間違いじゃなくて?」

まりりんが痛いところをついてきた。ほ、本当だもん! 明日休んだら単位1つ落としちゃうんだもん!

「大丈夫、みなしご探偵ナシゴレンは緊急特番で来週に持ち越しだよ」

「魔女っ子探偵七星レンですよ! みなしごってアニメのタイトル

に無理がありますから！　って、え？　特番？」

「そう。もう一枚の予告状の送り主が、君より有名人だね」

「私より有名人？　キッドさんですか？」

確か、最近は大盗のライバルの小学生探偵によって失敗続きの。

「いや、彼よりも有名人。何せ……ルパン三世だから」

今回の仕事、降りても良いだろうか。

03・ロンドン市街

ルパンの作戦はこうだ。

まず、今日中に不二子が博物館のセキュリティにハッキングして、博物館の見取り図、設置されたセキュリティ、そしてデイゴラスや警察の動向を調べる。

ルパンと俺は不二子の情報を元に必要物資を集める。ちなみに石川五エ門大先生は仕事前に精神統一だからどっかに消えちまった……ま、いつも通りだな。

セキュリティに関しては文句の言い様もないほどに完璧だそうだし、つまり、侵入するには最初から最終手段、強行突破しか無さそうだし、それでもある程度は時間稼ぎができそうらしい。

《侵入者かどうかのチェックは、顔認証と視認の両方みたい。あらかじめ私たちの顔を登録させておけば問題ないわ》

「視認のほうはどうするんだ？」

「映像をすり替えれば無問題でしょ。不二子、頼めるかい？」

《もー、仕方ないわねえ。高くつくわよ？》

……今夜は三ツ星フレンチのディナーになりそうだし、勿論、ルパンの奢りで。

侵入した後のセキュリティは監視カメラのみ。

しかし予想通り、ターゲットが保管されてる部屋のセキュリティは厳重のようで、赤外線センサーやサーモグラフィは勿論、ターゲットの半径五メートル以内に重量センサーが存在するという。

《サーモグラフィの解除はこつちで出来るみたいだけど、重量センサーだけはその部屋にある機械を操作しなきゃ解除できないみたいよ》

「ちなみに壊すとどうなるんだ？」

《自動で警報が鳴っちゃうみたい》

「つまり、その警報が鳴らないようにしちゃえばいいってことだな」

「簡単に言ってくれるぜ……」

次元は思わず頭をかかえた。

《あと目立ったセキュリティは無さそうね。それだけ自分のガードマンに自信があるみたい》

「だろうな」

「ありがとな不二子、引き続き頼むぜ」

《今夜のディナー忘れないでよねー》

全く彼女らしい言葉を最後に、不二子からの通信は切れた。

「必要なもんは銃器くらいか」

「ああ。買い出しは後回しにして、ドライブ続行とするか」

ルパンはそう言うと、道路脇に止めていた車を発車させた。珍しくレンタカーを借りた理由はこれが。

向かうはロンドン郊外。つまり、ドライブという名の下見だ。

通信を切った不二子がパソコンの画面に目を戻すと、新しい情報が入ってきていた。

「あら……?」

監視映像に、銭形の姿がある。そして、彼の傍らに居るのは、初めて見る顔。おそらく新人捜査員か。そのなかでもかなり若い分類にはいるだろう。それか、かなりの童顔か。

海外の生活が長いせいで、年齢の感覚も完全に欧米化してしまった。もし日本人の感覚が残っていたら、彼を25歳前後に見積もっただろう。しかし、彼女の出した答えは。

「大学生……うーん、それとも高校生?」

画面にうつる青年をデータベースで探してみるが、ヒットするものは無かった。

04・KB博物館

私……いや、今は俺でもいいか。何しろ単なるモノローグだ。流石に声に出したら不味いだろうが、心のなかで考える分には俺で十分だろう。

そんな俺は現在、勤務中だ。

勤務先はインターポール。そしてここは、例の予告状がターゲットとした博物館である。

新米刑事がこんなデカイ舞台に立つことになるだなんて普通想像もつかないだろうが、現に俺はここに居る。

何故なら今の俺の上司が、あのルパン三世を長年追い続けている、あの銭形警部だからだ。……フルネーム聞くタイミング逃した。そんな純日本人のうちの上司は現在。ターゲットとして指定されたKB博物館の館長、デイゴラス氏と揉めていた。

「しかしですな！」

「ですから、あなた方の協力はありません」

さつきからこの調子だ。もうすぐ10分経つ。

「何度も言いますが、当館のセキュリティは完璧です。ネズミー匹の侵入も許さず、例え侵入したとしても確実に外への脱出経路を遮断します。」

警備員は全員 元軍人を起用しているので、万が一銃撃戦になっても何の問題もありません」

「ですが相手はあのルパン三世です」

「そのルパン三世相手に犯行を許し、逮捕すら出来ないあなた方を

信用しろと?」

デイゴラスの射るように冷たい視線が此方に向けられた。

隣で彼の説得を頑張っていた銭形さんは、先ほどのデイゴラスの言葉で口をつぐんでしまった。かなり痛いところを突かれたってことか。

「でしたら、これならどうですか?」

俺は急遽、上司の了解をとることなく、彼に交渉を試みることにした。

「館内警備はデイゴラス氏に一任するとして、それ以外、館外の警備を我々が取り仕切る、という形にします。

そうすればデイゴラス氏は館内の警備を徹底できますし、我々も上から怒られることなく仕事が出来ますからね」

一旦言葉を切り、銭形さんの方を見る。彼は何も言わず、目配せだけした。

「デイゴラス氏はこの博物館のセキュリティに絶対の自信をお持ちだ。つまり、あなたが信用していない警察の外の守りがルパンによって崩されても、館内のガードは安全だという自信がある、ということですよね」

「当然です。例え侵入されたとしても、確実に彼を捕らえてみせます」

「ならば」

デイゴラス氏が言い終わるか終わらないかのタイミングで、彼がこちらに注目するように強く言葉を言った。

「我々ICPOはデイゴラス氏が現行犯で捕らえたルパン三世の身柄を、あなたから受け渡してもらえば良い。ですよね？」

何故なら貴方はただ単に博物館の品々を守りたいだけで、ルパン三世を協力するつもりは全く無いのでしょうか？」

「勿論ですよ」

「そうでしょう。まさかルパン三世に協力するために我々の協力を許さないなんてことはあり得ませんよね」

「当たり前です。私はただ単に、警察が協力せずとも捕まえる自信があると言っているだけですから」

よし、そろそろ平気だろう。

「では、館外の警備配置の参考としたいので、博物館敷地内の全見取り図と監視カメラの位置、あと、敷地内にあるセキュリティの資料全て頂けますか。」

「……………わかりました。今用意させますので、少々お待ち下さい」
(よし、勝った！)

デイゴラス氏は顔を少々歪ませるも、大人しくこちらの指示に従った。俺の予測通り、彼にとってルパン三世とグルであると疑われることは、手の内を見せないことより数段嫌だったのだろう。

どこかに携帯で連絡をいれるデイゴラス氏を尻目に、俺は銭形さんに謝った。

「すみません、勝手に話を進めてしまって」

「構わんよ。君が提案していなければ、私が同じこと案しただろう。おそらく彼は、警察が介入することを快く思っていないだろうからな」

「そうですね」

ここへ赴く前に見た資料の内容を思いだしながら、俺は銭形さんに同意した。

(S・C・デイゴラス……やはり、厄介だな)

「銭形さんは、彼がルパンを捕まえられると思いますか？」

「いいや」

すぐに返答した銭形さんは、確信を持つ声だった。

「あ奴は必ず逃げる」

「必ず？」

「ああ。奴はそういう奴だ。どんな危機に陥っても、必ず生きて脱出してしまふ」

それは、ルパンに巻き込まれた張本人だからこそその言葉なのか。ただ単に「泥棒」と「警察」だけの間柄では無い、ある種の絆さえ出来てるように思わせる。

そもそも逃げるのに生死もなにも無いような気がするのだが。余程裏社会に敵でもいるのだろうか。……今はともかく。

「つまり我々は、ルパンが逃げた《後》のことを考えなければいけないんですね」

「そういうことだ。……時に、君」

「なんでしよう」

「君は本当に新米なのか？」

「そうですね。配属されてまだ二ヶ月も経ってませんからね」

「それにしても、さっきのはまるでFBIのネゴシエーター並だったか」

「実はアメリカン刑事ドラマのファンなんですよ。それにほら、コトワザにもあるでしょ？ 押した後には引くが良しって」
「それは《押しでも駄目なら引いてみる》じゃないのか？」

銭形さんの最もな指摘に、俺は曖昧に誤魔化す。

日本に詳しくない役は、案外大変だ。

04・KB博物館（後書き）

ようやく銭形さんが出てきました。ですがしばらく出てきません。

モノログで語る「俺」こと新米刑事さんは、翌日、月曜日に正体をハッキリさせる予定です。

キルシエ側の人々は残り三人、計六人の予定です。

全員の名前が出てきたところで、オリジナルの連載も出来たらなと思います。

次回の更新はいつ出来るだろうか……

兎にも角にも、ここまでお読みいただきありがとうございます！

05・ロンドン、某ホテル

無理だ、無理無理、ありえない。

オーパーツ回収実行部隊の中でもずば抜けて出来の悪い私がルパン三世より先に呪いのヤマザキを奪取する？ 機関は私を一体なんだと思ってるんだ。記憶操作が出来ないほどの落ちこぼれだから怪盗という形でようやく仕事をこなしているというのに、世界一の大泥棒やイギリスやくざを相手にするってそんな危険な仕事を勤められるかっての、まず構図がおかしいから、敵は全員拳銃所持してるから。

ムリ、無理。ほんと無理。

『でも、ルパン三世が予告状出したおかげで隠蔽出来なくなっちゃったからねえ。例え世界中の人間全員を記憶操作したとしても、あらゆるメディアに《操作前情報》が全世界に沢山残ってしまう。だからこつちも同じ手口で対抗するしか無いんだよね』

アパートでの監理官代理の言葉が脳内でよみがえる。

あのときはあまりに真面目な顔して言ってたから納得してしまっただが、よくよく考えるとメディアに《あれ》の正体は知らされてないから、記憶操作も隠蔽も何の問題もなく行える。それが駄目ならば本物を偽物とすり替えちゃうって方法もあるし。それに気付いたのは代理が用意してくれたプライベートジェットがドーバーを通過中な時だった。

今は、博物館と同じロンドン市内にあるホテルの一室でくつろいでいる。ここも代理が用意してくれたもの。最初代理がホテルのフ

ロントに声をかけたとき、何の手續きもなくスイートに通された……庶民でチキンな私は勿論即ランク下げてもらったけど。あいつ本当に何者なんだろう。いや、うちの代理だけどさ。とにかく顔パスでスイート取れるなんて異常すぎる、表は学生のはずだよね？

《コンコンコン》

ふとドアをノックする音が聞こえた。ノックが二回だったら「入ってます」って言ってやろうと思ったのに。つまらないな。

「合言葉は？」

とりあえず外にいるであろう人物に声をかけてみる。ちなみに合言葉なんてものは無い。

「夜食いる？」

「喜んで」

その一声で扉を開ける。しかし、廊下に居たのは宮古内秋彦だけではなかった。

「え、誰？」

「君もうちよつと礼儀覚えたほうがいいかもよ」

仕方ないじゃないか、心の声が勝手に出てしまったんだもの。ともかくにも、代理の横には不機嫌そうな美少女が立っていた。

「彼女は僕の秘書兼護衛で、朝倉紅ちゃん。僕らより先にロンドンで情報収集を頼んでいたんだ」

SOS団のリーダーみたいに不機嫌だなと思ってた彼女は、びつくりすることにそれを監視する宇宙人・バックアップの方と同じ苗字だった。そんな彼女はこちらの驚きなど気にする素振りもなく、到着したルームサービスを黙々と食べていた。あれ、秘書とか言うてなかったか？ 秘書って一緒に食べていいもんなんだ？

ある程度彼女が食事を進めた頃合いを見計らってか、代理は紅さんに説明を任せた。

「ターゲットはKB博物館二階の特設ルームに保管されています。これが見取り図です」

任された彼女は一旦フォークを止めて、ジャケットから封筒を取り出した。

受け取って中身を見てみると、いくつかの博物館のスナップ写真と、印刷された地図が二枚あった。地図のひとつは敷地全体のもの、もうひとつは館内のものだ。

「館内全体には赤外線センサーとサーモグラフィ、ターゲットの半径5メートル以内には重量センサーが設置されています。それらが侵入者を察知すると警報が鳴り、その30秒後には全ての入口にフィルターが降りるシステムのようにです」

「どうやって侵入者を区別してるの？」

「顔認証システムよ」

「ようは、監視映像に映った人物をメインコンピュータのデータに保存されてる人物と合致しなければ、侵入者として通報する仕組み

だよ。館内で働いてる人の顔のデータのあらかじめ登録しておく
だ」

「へー……」

「ちなみに赤外線とサーモグラフィはハッキングで解除可能なの
がわかったので、あちらのハック察知プログラムを凍結させておき
ました」

「はあ……」

よくわからないが、ようは何か色々やって、バレない工作をした
のか。

「重量センサーのロックは独立してるので、特設ルームに行かない
と解除できませんが……」

「君なら平気だよね」

「もちろんです」

ようは、地面が重量変化を察知しなければいいのさ。

「それと、おそらくですが、ルパン三世が現れるのは明日の正午。
その際自動で監視映像が録画にすり代わるようにプログラムされて
ました」

「そっか、ルパンさんは監視カメラに映るんだもんね」

「というか君以外は皆そうだよ」

以上で報告は終わりなのだろう。彼女はテーブルに置いていたフ
ォークを再度持つと、残りのディナーを食べ始めた。

「え、じゃあ、後は私が盗みに入るだけ？ カメラ映像すり替える
必要無しってこと？」

「そういうことかな」

なんということだ。それだけはルパン三世様サマだ。

「じゃあ、あと必要なのは予告状だけだね」

「あ、そのことなら心配しないで。出発前にちゃんと手配しといたから」

笑顔でいい放つ代理に、メインディッシュをつつくフォークの手が止まる。

「……………出したって、誰に？」

「それは勿論」

答えを聞いて切実に思った。

代理、テメエなに勝手に敵増やしてやがるんですか。

06・そのころの都内某所

『現場の大迫さん？』

『はい。昨日、日本時間の午後6時にイギリスのロンドン市警の記者会見で判明したルパン三世の犯行予告時間まで、あと14時間となりました。予告時間はイギリス時間で正午、日本時間での本日夜9時となります。』

今回捜査の指揮をとるのはインターポールにも所属している日本警察の銭形警部と、ロンドン市警警視の……』

「ルパン三世ねえ」

「なに、七重も気になるの？」

「別に。どこにでも四葉みたいな馬鹿がいるんだなと思っただけですよ」

カフェのラジオから流れる情報のくだらなさが自分の親友の姿と重なり、葵は思わずため息をついた。

朝の7時。通勤するサラリーマンを横目に、その2人はカフェでのんびりと朝食をとっていた。

エスプレッソを啜る七重葵と、ホットサンドを幸せそうに食べる神谷恭子。女性らしい雰囲気の恭子と冷酷な目元をもつ葵は、双反する印象を持ちながらも、共に二課の刑事だった。

「あー、そついや最近表舞台に出てこないけど。彼女元氣？」

「相変わらずらしいです」

メガネの奥で絶えず通行人を観察していた目に、暗い色が浮かぶ。

「体育で人外なパフォーマンスをやってしまったたり、授業の単位がギリギリで補修生活だったり。一限に遅刻スレスレで登校するのも変わってないらしくて、楓が嘆いてました」

「ほんと相変わらずだねー。それに一ノ宮とか懐かしいな。もう二年も経ったのかー」

言いながら、恭子は最近ボブカットにしてしまった髪の毛先を指で遊ぶ。前まで肩までの長さだったのに勿体ないと思うが、失恋だから仕方ないか。……彼女の思い込みだという西健の説は正しい気がするのだが。

「そうですね、先輩もあれから二年老けたん……いはいれふへんふあ
い」

「まだ若いっつーの」

「ふいひゃへん」

「分かればよろしい。って、携帯光ってるけど」

「いまでもですよ」

いままで思い切りつねられていた頬を労りながら、葵は携帯を開き、通話ボタンを押した。

「はい、七重。……いや、まだ赤坂にいる。…………は？」

「どうしたの？」

普段の葵なら見せないような表情に、恭子は何かと首をかしげた。口を半開きにし、目も驚愕に見開いてる。頭も勘も鋭い完璧主義者の葵にはめったに見ない光景だ。

《いや、だから。どうやら宮古内さんが情報をメディアにリークし

たというか、つか七重さんのデスクに現物置かれてるっていうか…
…あ、鑑識さん！ こっちこっち！！」

フリーズした葵を不審に思った恭子だが、ラジオから流れてきたアナウンサーの声で事態を把握した。

「たった今入った情報です！ なんと、あの怪盗キルシエもルパン三世と同じ場所、同じ時刻に同じ美術品を狙うとの情報が入ってきました！ 詳細は警察の発表が未定なので分かりませんが、おそらくキルシエは既にここ・ロンドンに潜入したとの予想が……」

七重葵は静かに携帯を閉じ、それを握りしめた。

「あの馬鹿、ことごとく人の仕事を増やしやがって……」

会ったら絶対ぶっ飛ばす。

そう決意した葵の手のなかで、携帯の外装にヒビが入った。

「おはようございます」。

いや、自分としては「ます」まで言い切ったつもりだったのだけ
ど。まさか出勤早々カバンを顔面で受け止めることになるなんて。

兄と違ってコンタクトで良かったなど思いつつカバンの持ち主を見る。そこには超がつくほどの美人さんが立っていた。あれれー、おかしいぞ。出勤前に別の場所で一度見た顔だ。つまり同棲相手の七重葵がそこにいたのだ。ちなみに七重とは恋人同士でもないし、俺の好みでもないし、誤解されるような何かも一切ない間柄。ただ純粹にルームシェアしているだけだ。

でも普段こんな朝イチにここへ来る用事などないはずだ。まず今は勤務中だろうし。

「サボり？」

「仕事」

俺の短い質問に、七重は同じく短く返答した。何故だ。俺より先に出かけてったから確かにここにいるのは不思議では無いが、七重は現職刑事で、ここは探偵事務所。刑事が来る要素は無い……と思いたい。だってここは不倫調査を扱うこともなければ、迷子の犬猫探しをするわけでもない。企業からたまに依頼があるものの、基本的には専門外だ。

だから、詐欺や知能犯を専門に扱う二課の刑事が来られても、他の探偵事務所を紹介するくらいしか出来ないのだけだ。

「お前の所長には許可を取ってある。行くぞ長谷川」

「待てよ七重、行くって何処に」

いきなりの展開についていけない。どういうことだ、また所長は俺を警察に売ったのか？ いわゆる特別なんとかってやつなのか？

やめてくれ、俺はあくまでも一般人で事務会計が職務なんだ。

しかし勤務中の七重に優しさの成分などひと欠片もない。容赦なく死刑宣告を言い渡してくるのだ。

「イギリスだ。キルシエが予告状を出した」

白崎一、頼むから風来人しないで早く現場復帰してくれー。
心のなかで私立探偵のナルシー野郎に切実に訴えるも、あいつのことだ、そう簡単に思いは届かないだろう。ああこれから不本意かつ非現実な世界に再会するのかもしれないと思うと頭が痛くなる。病欠とかないですか無いですよねスミマセンでした。

父さん母さん。長谷川一樹は今日も世界のどこかで生きています。

07・カウントダウン(前書き)

泥棒たちは出ません。

07・カウントダウン

ロンドン郊外。19世紀のマナーハウスを改築したKB博物館内、特設ルーム。

犯行予告時間の一時間前の今、セキュリティに手を抜くことが出来ないために間近に見ることはできないが、それでも五メートル先にある《それ》に、ディゴラスは歪んだ笑顔を向けていた。

「ルパンにキルシエ、か」

ルパンは強敵だが、キルシエと名乗るのは日本という軟弱な国でしか活動しない泥棒。しかも、聞くところによると正体は小娘だという。

こちらが本気を出せば数分もしないうちに全て片をつけられるだろう相手だ。そんな小娘がルパン一味に、そしてこの私に喧嘩を売るとは世間知らずも良いところ。

日本であれば逮捕されるか逃げるかのどちらかだったろう。しかし、ここは日本ではない。

「正当防衛すればいいだけのこと」

日本から奪った《それ》を眺めながら、ディゴラスはクツクツと

笑った。

まさか、日本にあるとは思ってもよらなかった《それ》。幸運にも私の手のものが手に入れることが出来た。

部屋の四方や外を固める警備のものには、ネズミの始末は自由にしていると言っている。

「さあ、せいぜい楽しませてくれよ、ネズミども」

デイゴラスの目は、狂気に満ちていた。

某ホテル。

犯行予告時間まであと30分ともなれば、すでにここには怪盗キルシエは居ない。

彼女のことだから、おそらくもう博物館のそばにある大きな公園で準備運動でもしていることだろう。

そして、ホテルに残ったのは《あれ》の本来の所有者だった宮古

内秋彦と、その秘書の朝倉紅。

2人はスイートルームのテーブル上に大量に並べられた資料を前に、ソファでのんびりしていた。雇い主と秘書、という関係は只今休止中で、いまは単なる腐れ縁状態である。

「本当に大丈夫なのかな」

「大丈夫。彼女は《出来る》と思ったら、必ず出来る人材だよ」

「……そりゃ、そうなのでしょうけど」

彼女の基本データに目を通してあるため、一応心配は無さそうである。

だけど、相手はマフィアよりタチの悪いディゴラス。

紅としては、彼女の仕事の成功有無よりも、彼女自身の安全のほうが心配だった。

「それに」

紅とは逆に、なにも心配ないと言った風の秋彦は、先ほどの穏やかだった表情を少し変化させた。

「準備は整ったからね」

「準備？」

「そう。これで……」

秋彦はソファから立ち上がり、後ろの全面ガラス張りの向こうを見下ろした。

たくさんのパトカー、報道陣、野次馬。
外を固める警察、中で武装する私兵、スタンバイ中の怪盗。
それから、向こうが予想してないだろう駒が、全部で三種類。

「役者は全て揃った」

この僕を敵にまわしたんだ。それ相応の覚悟をしてもらわないとね。

その時の秋彦の表情を見て、やはり彼を敵にまわすもんじゃないなと思つた紅だった。

「ルパン以外にも狙つてる奴がいるだど!? なんでそのことをもつと早く言わんのかね!」

「だからこちらはお宅に何度も申しましたとも! しかしそちらが一向に取り合ってくれない、だから直接現場に赴いたんです!」

犯行予告まであと10分という時間まで迫つたロンドン郊外。博物館の外、私兵とマスコミ・野次馬に挟まれ警備を執り行っているロンドン警察の一部で、二人の日本人が口論していた。

銭形と、七重だ。

「ううむ……確かにこちらにも非があるが……いやしかしですな！
あと数分とたたずにルパンも来るのですぞ！」

「そんなことはいいいんです！ 早く向かわないと手遅れに……っ」

焦る七重。しかし、銭形も心境は同じだった。いくら警備を万全だとデイゴラスが言っても、相手はルパン三世。なのに自分たちは敷地内の警備すら行えない。

決まりは決まりだ。だから、彼女たちのことも止めるしかないのだ。

「しかし、まだこの博物館に誰かが侵入した形跡はありません！
ですから七重くんも落ち着いて……」

「あー、もう！ これだから部外者は面倒くさい！」

「七重！ 強行突破はまずい！」

「離せ長谷川！ 何で北条の野郎が中に入れて、この俺が入れねえんだこんちくしょー！」

「言葉言葉！ 男言葉になってるから！」

どうやら先ほどから相手にされていなかったからか、七重の苛立ちはピークに達していようとしていた。しかし仕方ない。何故なら警部補もその部下も日本人。いくらキャリアを重ねた公務員でも、ヨーロッパの感覚では学生カップルにしか見えない。ロンドン警察の連中には野次馬とあしらわれ、ようやく銭形警部と話せたと思っても事実上門前払い。

しかしそんなことよりも銭形は、七重の一言が引つ掛かった。

「何故きみが北条くんのことを知ってるんだ？」

確かに彼は、今回捜査に加わっている。

犯行予告時間まであと5分を切った、KB博物館敷地外。

「あーあ、七重来ちゃったよ」

銭形警部とは反対側、つまり博物館から見て西側の、一番人けがない場所。

インターポールの新米職員でもある彼は、銭形に取り付けていたマイクロサイズの盗聴器から発信される会話に苦笑していた。

「ポーンとビジュップがそろった」

銭形の盗聴器から警察の無線へスイッチひとつで切り替える。コートとスーツを脱ぎ捨て、ライダースーツにジーンズというカジュアルな姿へと早変わりする。ついでに手をグイッと引っ張り、まるでヘビが脱皮するかのようシリコン製の手袋を剥がし取り、今まで彼の指紋を消し去ってくれていたそれもコートの上に捨てる。

「キングは不在、ルークは高見の見物か。本当いいご身分だよ」

文句を言う割にはその無表情は変わらない。

時限式で服が燃えるようにセットをし、ライダースーツのポケットからバイク用グローブを取り出して手にはめ、これで準備はOKだ。

「それでは、ナイトはナイトらしく、クイーンを守りに行きますか」

周辺にいた警察とディゴラスの私兵を催眠スプレーでダウンさせ終わった北条は、既に自分の妹がスタンバっているであろう真後ろにそびえ立つ洋館の二階を見上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2706k/>

ルパン三世 vs 怪盗キルシェ

2010年10月9日23時40分発行